Tokyo Evening
2016年(平成28年)
5月9日
月曜日 夕刊
朝日新聞東京本社
〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
電話 03-3545-0131 www.asahi.com

被災の痛み 話してほしい

熊本地震

「臨床宗教師」各地から

熊本地震の被災地に、宗教者たちの支援が広がっている。被災者の声に耳を傾ける臨床宗教師＝🔑＝が各地から駆けつけ、寺や教会を避難所に開放するところもある。心のケアに動いた東日本大震災の経験が息づく。

「ばあちゃん、困ったことない？」。最大約120人が避難した熊本県宇城市の老人ホーム。震災10日後の4月24日、窓の外をぼんやり眺める避難者の女性(86)に、臨床宗教師の糸山公照さん(39)が語りかけた。市内にある真宗大谷派・光照寺の副住職だ。

女性の家は2度の強い揺れで損壊した。昨年12月には66歳の長男に先立たれ、糸山さんが葬儀をした。女性は言う。「よく知るお坊さんが話を聞いてくれるだけで心が収まります」

東日本大震災の後、糸山さんは臨床宗教師の養成講座を東北大で受講。宮城県石巻市の仮設住宅などを回り、被災者に寄り添ってきた。今回、足元で「まさか」の震災。すぐに米を精米し、炊き出しに備えた。「被災地支援の経験がなければ、何をしていいかわからなかったと思う」

寺は本堂の瓦や壁が落ち、本尊や墓も壊れた。住民が身を寄せたが、本堂が余震で倒壊するおそれもあり、交流のあった老人ホームに住民を受け入れてもらった。糸山さんは車中泊をしながら米や畳を届けた。

地域の避難所を回り、被災者の声に耳を傾けている。94歳の女性は打ち明けた。「家もお金もない。長い避難所暮らしで体も痛い。もう死にたい……」

糸山さんは「誰もが今後の生活に不安を抱えているけれど、避難所ではみんな被災者だから言い出しにくい。その不安を聞き、心を和らげたい」と話す。

臨床宗教師は糸山さんのほか、九州や京都、仙台などから約10人が益城町や南阿蘇村に入り、避難所で傾聴活動を続けている。

臨床宗教師の養成に携わってきた熊本市中央区のキリスト教牧師、立野泰博さん(55)は「今回は余震が心配で家に戻れない人が多い。東北と異なる不安に、どう寄り添うかが課題です」と指摘する。

熊本市東区のキリスト教会「ルーテル健軍教会」も最初の地震直後から住民に礼拝堂を開放。3歳から93歳まで最大約50人が避難した。全国の系列教会から物資が素早く届く。3階建ての建物は阪神・淡路大震災の4年後にできた鉄筋コンクリート造りで頑丈だ。牧師の小泉基さん(47)も避難者の不安に耳を傾ける。「みんなで食卓を囲み、大きな家族のようになってきた。被災者に安心を与えるのが役割です」

熊本城を築いた加藤清正の墓がある日蓮宗本妙寺（熊本市西区）。ここも一時、避難所になった。余震が続く中、2002年に鉄骨で再建した拝殿に住民15人がしばらく身を寄せた。

僧侶の後藤本晃・寺務長(57)は「寺には広い空間があり、顔見知りの人もいて畳の上でくつろげる。寺へ行けば何とかなる、という安心感を持ってもらえたと思います」と語る。

（岡田匠）

牧師の立野泰博さん（右）ら臨床宗教師が被災者の話に耳を傾ける＝4月23日、熊本市中央区

🔑 臨床宗教師

東日本大震災の翌年、宗教者対象の養成講座が東北大にできた。在宅ホスピスケア専門医で被災者支援「心の相談室」室長だった故・岡部健さんが発案。欧米の病院で心のケアをする宗教者「チャプレン」を手本に、特定の宗教・宗派に偏らない立場で宗教的ケアに取り組む。上智大や京都・龍谷大にも養成講座ができ、2月には日本臨床宗教師会が発足。活動は全国各地に広がる。